

生存科学研究ニュース

VOL.9, NO.4

1994, 7, 10 発行

発行 財団法人 生存科学研究所

〒104 東京都中央区銀座4-5-1 聖書館ビル303

電話03-3563-3518

第4回生存科学シンポジウム 「脳科学の進歩」

6月18日(土)午後2時より、東京都千代田区上智大学教室において標記、生存科学のシンポジウムが開催された。今回のメインテーマは「脳科学の進歩」であり、昨年7月の東京における第3回生存科学シンポ、同11月の京都における基本構想委員会に続き脳科学に関する第3回目のシンポジウムである。

シンポジウムは、前岡崎国立共同研究機構 機構長 江橋節郎氏(生存研評議員)が座長を務め、脳科学の根幹は、分子生物学、情報科学、機能形態学であり、それは今や診断機器の進歩で人間における高度脳機能にもアタックしていることを紹介、脳科学の進歩は危険も伴うことを警告して、その研究は広い裾野を持って進めるべきであると強調した。

講演第1席は、東京大学医学部教授杉下守弘氏による「大脳優位半球と脳梁」で、氏は、NMR等の機器の発達で記憶や言語も科学の土俵に上がるようになってきたと前置きし、左右対称となっている器官としての脳の機能について失語症を歴史的に概括、嘗ては左半球の損傷で失語症にかかる、それは利き手との関係であると考えられていたが、現在では左ききの人でも左半球の損傷で失語症になる人の方が右半球の損傷の場合より多いことを紹介、さらに自らの研究成果を含めて、脳梁の損傷で起こる視覚の異常等の脳機能の変化を紹介し、脳梁

が分業していると述べた。

講演第2席は、関東中央病院脳神経外科部長塚本泰司氏による「脳神経外科手術における Decision-Making」で、氏は、脳ドックで発見する脳動脈瘤や脳腫瘍を例に取りながら、放置による危険の発生率、手術による危険の発生率等からの Decision Tree や、それ等が手術後の生存年数や、死亡と遷延性植物状態とのどちらに価値観をおくのか等により変化することを示し、Informed Consent に伴う困難性を述べ、またアメリカでも、病状の説明を80%の患者が希望しているが、治療法の選択までを希望する患者は33%であり、その選択を医師に任せる患者が多いことを紹介した。最後に、脊椎破裂症患者の手術選択における外科医としての悩みを率直に披露し、参加者の討議を喚起した。

講演後の質疑応答では、脳の治療・脳科学の諸問題が生命倫理や医事法との関連で、また、さらにそれを越えて幅広く人類生存の立場から真剣に討論された。

生存科学研究所基本構想委員会・ バイオサナトロジー学会共催研究会 「いのちについて」

5月28日(土)午後2時より、生存科学研究所会議室において、標記の研究会が開催され、東京大学名誉教授玉城康四郎氏が「いのちについて」と題して講演を行った。

氏は、仏教学者であると同時に仏教者で

もある。また生存科学研究所が創設当初の数年間行った研究会「科学と人間」のメンバーの一人である。開会に先立ち生存研土屋健三郎副理事長が挨拶し、続いて小平敦専務理事が、基本構想委員会の意義とその中における玉城氏の思索や研究の重要性を参加者に紹介した。

玉城氏は、仏教の生命観は普遍的生命観であり、禅定により仏教の真髄に至ると仏教の枠がはずれ、人間の原点に到達する、その原点から現代人は復活すると前置きしてから、「いのち」について、大集経の寿・煖・識が渾然一体となった歌羅羅を、宝積経の地・水・火・風や在胎期間を説明し、さらに、生命の統括体（歌羅羅）の目覚めであり、おのずから宇宙生命につながる「解脱」と、その方法としての禅定（すなわち全人格的思惟）について述べた後、homeostasisから大脳生理学、免疫学にいたる科学の発展と全人格的思惟との対比、客観的思考と主観的思考との関係、業熟体、生老死の表舞台とその裏にあるもの等を論じ、以下のように結んだ。

人間が、ゴリラやチンパンジーから分かれて人間となり生きていくうちに、自然に「いのち」そのものに気づいてきた。昔の人が気づいてきた「いのち」に現代人も気づくことができるはずである。それなのにどうして何度も戦争をしたり殺し合いをしたりするのか。自分で知らないうちに免疫機能により異物を排除するという事は「業」の一つの例である。このように生きものは自分が知らないうちに業を犯している。

生命の創発から、業熟体として、あらゆる生きとし生けるものと交わりながら、今ここに現れている一人一人の人間そのまま、最もプライベートなものであると同時に、全人格体・宇宙共同体の結び目である。それは底なしであり、無知であり、暗闇であるから、全人格的思惟により「いのち」をもとからみる必要がある。それを教えたのが仏陀である。全人格体も業熟体も、確かな、正しい、真実の、方向に向くよう訓練しなければならない。こうして得られる正しい魂の方向、本当の真実の方向の「いのち」については、仏陀も孔子もソクラテスもキリストも同じであり、科学の求めるものも当然同じところに行くはずである。客観的思考も主観的思考もやがては

一体となるであろう。

人間80才を過ぎると体力、気力、知力は衰えるが魂の目覚める力は急速に高まる。それはもともと「いのち」が動かされているからである。しかし80才を過ぎてからでは遅い、若い人達に早く気づいてもらいたい。

講演後、活発な質疑応答が行われた。

生存科学研究所・バイオサナトロジー学会
共催北陸研究会

6月4日（土）午後2時より、石川県金沢市において、標記の研究会が開催され、上智大学生命科学研究所教授青木清氏（生存研常務理事）が「物質文明から精神文明へ」と題し、また埼玉医科大学名誉教授秋月龍珉氏（バイオサナトロジー学会顧問）が「『生と死』東洋・西洋」と題し、それぞれ講演した。

青木氏は、武見先生が世界の人々の問題を真剣に考え、その中の一番重要な問題として「生存」を考えたこと、生存の直訳はsurvivalであるがそれにはより高い生き方で生きるという意味（当然人間以外の生命も含めて）もあることを紹介し、そのフィロソフィーを伝えたいと前置きした後、ビッグバンに始まる宇宙の進化、その中での生命の誕生から人間への進化、そして自由を得た人間の脳の発達と科学技術の発展を述べ、それにより、原爆問題、環境・資源問題など自らの生命を脅かすことにもなったこと、中でも人口問題の厳しさを指摘し、生命の貴重性と尊厳に前提をおいたうえで、人間の脳の発達でもたらされた物質文明によるこれまでの科学技術や医学の発達、すばらしいものではあるが人類の生存をまともに考えてはこなかったのではないかと疑問を提起し、科学技術をさらに発展させる必要はあり、遺伝子操作は生存に役立て得るけれども、しかしそれだけではまだ十分ではない、生存（よりよく生きる）のために、物質・エネルギーの世界から、生物世界へ、そして精神世界へと進んできた宇宙の進化と同じように、これからは争うことなく等しく分け合うことの出来る精神文明を作り上げ、よりよい精神世界を構築する必要があると強調し、それによってしか人口問題への取り組みも出来ない、それにはさらなる脳の発達とそのための教育に期待が寄せられると結

んだ。

秋月氏は、東洋と西洋のヒューマニズムの統合・ポストモダニストとして重要な役割を果たしていると紹介された後、加賀の三哲生誕の地に来たことを喜びながら、エリザベス・キューブラ・ロス女史の生きざまと愛の実践、遠藤周作氏の輪廻転生小説などに触れながら、以下のように講演した。

自分は、サナトロジー（死）をバイオ（生）の線上に考え、生存そのものに至心する新大乘の観点から、自らは死者儀礼を行わない僧である。仏教の本来の目的は死者儀礼ではなく、四苦八苦よりの解脱にある。釈迦は苦と生死輪廻の執着からの解脱を涅槃に求め、悟りを得て仏陀（宗教的完成者）になられたのであり、決して神の力に頼ったのではない。

そういう意味で釈迦は無神論者であって、インドヒンズーイズムと一線を画するものであった。しかるに日本において輪廻転生・臨死体験・オカルト的なもののみもてはやされ残念である。

よりよく生きるにはさとの智慧・般若こそ求められなければならないと禅仏教は云う。仏教では知識と智慧とは区別されている。知識中心の心身分離・二元論的立場や哲学を越えた新しいサイエンスをクリエートするための哲学が必要である。

第13回「東西の健康観・医・薬」研究会 オータナティブ医学とエコロジー

5月6日（金）午後2時より、国文学研究資料館・歌野博 委員と、茨城大学人文学部教授・加納喜光氏により報告がなされた。

歌野氏は、「近時〈代替医学〉管見」として、先ず研究モチーフとして、自分の体は自分のものという直接性、自分のことは自分で選択するという実存性、さらに正統医学の有効性・安全性の両面に対する現代の不信感をあげられた。現代は、近代科学・医学のヒュプリス（奢り）が医学的にネメシス（復讐）されているともいえる。代替医学は、予定調和的な健康原理・健康理論をもち、近代医学に比して時代超越的な性格をもつ。今後、ヒトゲノム計画などの近代的手法による代替医学の分析、因果律を超えた説明原理の synchronicity 仮説の導入などにより、脱神秘

化が望まれるとされた。

加納氏は、「中国古代のエコロジー」として、秦漢時代の環境問題について話された。当時においても、道路、万里の長城、墳墓の造営などにより、「地脈」が絶たれ、地下水が涸れ、また治鉄工事によって森林が破壊されるなどの、環境破壊に対する現状認識がみられた。『淮南子』などにおいては、五行の実体概念としての、木、火、土、金、水を消費するという「五行浪費論」、環境にあわせた人間の行動基準である「時令思想」、「四時の禁」がみられる。支配者としての王は、自然に対して責任がある。さらにこれらの思想を現実につつした、森林保護官としての「山虞」などの環境保護機構の構想もみられた。

なお当日正午より、1992年11月6日の第4回本研究会のフォローアップとして、林克氏と高橋暁正氏により、五行論をめぐって、その思想上の価値と、実質医学としての価値についての討論がなされた。

地域社会インプット・アウトプット アナリシス新研究会設置打ち合せ会

5月9日（月）午後2時より研究所会議室において表記の会議が開催され、小平 敦、筑井甚吉、田村貞雄、向山定孝の諸氏が参加した。

平成4年度、5年度に生存研が別府市と研究してきた将来の地域生存対策モデルとも言うべき総合調査研究の取り纏めについて、整合性と優先順位の設定、阻害要因の指摘等への財団としての率直な意見を市長から求められたが、市全体の計画の中でどのくらいの規模で行われるかによって具体的に実践計画の提案を行うべきであると考えられるので、産業・保健・医療・環境等の重要項目の将来予測・計画に関わる地域生存関連分析により、文化その他の市財政全項目を含む将来計画の選択上の討議・合意形成・意志決定を計量的、相関的に行なえるような手法を開発して市の選択を求める、という方向で行くべきであると考え、高齢化社会に向かつての計画と別府市の産業の特長を生かしながら活性化を図るプランを踏まえた検討・分析が提言され、早急にそのための関連資料を作成し、分析を実施する準備に入ることが決まった。

平成6年度第1回理事会・評議員会

5月20日(金)午後3時より、生存科学研究所において、平成6年度第1回理事会・評議員会が合同で開催された。

会議では、5月10日(火)に開催された平成6年度第1回常務理事会において協議された承された平成5年度事業報告及び収支決算の説明が行なわれ、資金逼迫に遭遇しながらもほぼ当初の目的を達成することができたことが報告された。また先の理事会決定に基づき行われている、財政逼迫に対する今回の緊急寄付募集に対する会員からの寄付状況が紹介され、理事長代行から深甚なる感謝の辞が述べられた。

次いで提出議題が評議員会として討議され、了承された後、理事会として討議され、全員一致で採決された。

公益信託武見記念生存科学研究基金 平成6年度第1回運営委員会

6月7日(火)午後2時半より運営委員会が開催され、平成6年度の運営委員が紹介された後、平成5年度の実業報告、収支決算が報告され全員に了承された。引き続き、本年度の武見賞(武見記念賞ならびに生存科学研究武見奨励賞)の受賞候補者推薦について協議が行われた。近く受賞候補者の推薦依頼が生存研関係者に届けられる予定。

緊急寄付応募状況報告

今回の財団の緊急寄付募集に対して、理事会報告で触れたように多くの会員からご寄付が寄せられました。感謝の意を込めて平成6年6月末日までの応募者のお名前を列記します。(敬称は略させていただきます)

アイウエオ順

個人会員：青木 清、安達幹郎、有馬弘毅、伊藤元明、井上無限、内山 崇、卜部文麿、大江 透、香川保一、粕谷 豊、亀田嘉苗、吉川 暉、三枝靖夫、田村貞雄、筑井甚吉、土屋健三郎、豊川裕之、中尾喜久、中山昌作、永瀬正己、不破敬一郎、山口正民
法人会員：KK協和企画 総計242万円

「Ethical Dilemmas in Health and Development」 (英語版) 購入予約受付中

ハーバード大学武見国際保健講座関連事業として、生存科学研究所が平成4年7月に横浜で開催した第5回武見国際シンポジウムの発表論文と武見論文が、この度生存研の編集により学会出版センターから全文英文で出版された。その内容は「健康・開発に関わる倫理的諸問題」をメインテーマとするシンポジウムの特別講演と発表論文の主要なもの、および武見先生が嘗て上智大学で講演された『生存科学とバイオエシックス』の完全英訳文が収録されている。武見先生の思想を海外の人達に分って頂く絶好の資料となるし、日本語と違うニュアンスで武見思想を読み、理解を深める資料ともなる。

- * 予約購入価格は7,500円、ただし生存研の会員は6,000円。
- * 申し込みは生存科学研究所まで。

訂正のお願いとお詫び

生存科学研究ニュースVol.9.No.3「21世紀への大分のまちづくりシンポジウム『これからの人間が住み、生きる、新しい大分のまちづくりのプランニングと実践』」の文中に間違いがあり、主催者を“生存科学研究所と大分市医師会”とありますが正しくは“生存科学研究所と大分市”であります。お詫び申し上げます、ご訂正をお願いいたします。(編集子)

生存科学秋期シンポジウム予報

6月東京でのシンポジウムに続いて、本年11月19日(土)京都において生存科学シンポジウムが開催される。発表者は岡田時人氏と玉城康四郎氏の予定。詳細は次号。

研究所日報

- 5月10日(火) 常務理事会
- 5月20日(金) ジョイセフ理事長国井長次郎氏他と自治医大・生存研副理事長中尾氏他と会談
- 6月14日(火) 常務理事打ち合わせ、「生存科学」編集打ち合わせ
- 6月30日(木) 別府医師会長・伊東氏、小林副理事長、小平専務理事研究打ち合わせ